

「異臭魚」ボラ 汚名をそそげず 石原義剛

ボラという魚ほど、劇的に身を滅ぼされた魚もないだろう。江戸時代には、名前が大きくなるに従ってハク、スバシリ、オボコ、イナ、ボラ、トドと変わる「出世魚」なので、お目出度い宴席の膳には必ずと云っているほど乗ったご馳走であった。尾張藩の下級武士が書いた「鸚鵡籠中記」に度々登場する。今でも透明感のあるボラの刺身は旨い。しかし、ほとんどボラを敬遠して人は食べない。

そのボラが「異臭魚」の烙印を押されて、魚市場から消えたのは、昭和35（1960）年以降である。四日市工業地帯のコンビナートが稼働し始めてすぐ、“臭い魚事件”が発生した。工場から石油廃液が海へ垂れ流され、その近辺へ群れ集まって、泥のまま餌を摂っていたボラが着臭したのだった。都会の魚市場へ送られたボラが、油臭がして食べられぬと出荷が停止された。

四日市周辺の漁師らは、抗議に工場の排水口へ土嚢を投げ込んだ。当時はまだ、工場の排水を厳しく規制する法律もなく、全国でこのような廃水汚濁事件が頻発していた時代であった。日本は工業国へ邁進していたから、漁師らの抗議は、見せかけの緩い排水規制実施と僅かの補償金で、急いで解決がされた。しかし、その後も長く海の汚濁が止まることはなかった。

海へ排水が垂れ流されるとともに、空へ、空気中へ排ガスが垂れながされていた。それが工場周辺住民を四日市ゼンソクと呼ぶ病いに追い込み、多くの犠牲者を出現させた「四日市公害」である。

あれから半世紀余の過ぎたこの春、やっと新しい首長の決断もあって「四日市公害と環境未来館」が開館した。遅きに失したとはいえ記憶を風化させない砦となろう。ただ残念なのは、広い展示場のなかに海の記憶が残されなかったことだ。ボラはまだ“臭い魚”の汚名を着たままである。